道本
開山

雄譽上人傳記 壱

家傳

略

第六

共四

茅。三百五十九函

内閣文庫 和書 類 三四八七三 號 四 冊 一九三 函 一 架

和書 三四八七三號

内閣文庫		
番號	和	34873
冊數	4（1）	
函號	193	2

193-2

三科七大如來藏
五眼具足滿識身
本性影像同一體
生前没後無窮化

秘閣圖書之章
日本政府圖書

雄譽靈巖大和尚賛

道是市宇本立
末成闡揚浄教
毘賛太平酬焉

雄譽上人眞像

無碍擊則能鳴
誰此哲當永護
法城

淨土門主二品耀誉

尊超親王之章

刻靈巖上人傳記序

世有稱靈巖上人傳記
而其事實顛闕略矣近
三州松應寺賜紫存統
上人纂校洛東專念寺
順阿老隱脩飾道本山

主指巖上人垂巖公遠
忌上木布世於是傳々
記了見者以化其德聞
者以信其行則其所以
其所由其所安乃可觀
焉矣寛永中巖公住于

吾山之時奉　台命論
法義於　江城乃賜團扇
鳩杖今猶珍藏于寳庫
以此察之則傳中記事
百像此一事足以爲徴焉
是乎述序之意耳

天保四癸巳歳孟夏

總本山

大僧正聽譽

靈巖上人傳記章目

傳本卷之一

一家系 并 誕生剃度 初氏

一大巖寺初入寺 三氏

一隨道譽相承五重 五氏

一隨安譽傳兩脈 并 璽書補于大巖寺第三世 五氏

一於江城法門席有事爲辭生實 七氏

一南都靈巖院開基 八氏

一山城國宇治稱故寺住職 并 瀧鼻西光寺起

立　九丁
一於伏見城奉命生實再住　十二丁
付春日神前佛舍利感得
一生實江歸山　十四丁
付洪鐘感得
一龍澤山堂宇再建　十六丁
一龍澤山略縁起并衆人輻輳　十七丁
一安房國宗門弘通　二十丁
付里見家歸敬
一同國大網大巖院草創　廿二丁
一大巖院本堂建營并從天津山出材木　廿五丁
一同院堂供養法門　廿八丁
付別時開闢
一同院壽像安置有瑞　廿九丁
一中尊佛於南都造營　三十丁
付神明影向
一盜賊源兵衛發心自殺　卅一丁
一石田三成亡魂乞得脱　卅五丁

傳本卷之二

一 平生行狀略 一丁
一 對發心者教誡詞 二丁
一 上總國五井守永寺開基 五丁
一 里見忠義朝臣授戒 六丁
一 或僧於御前讒奏 八丁
一 上總國佐貫善昌寺移住 十丁
　付 濟度幽魂救難産
一 同國湊村亡靈得脫 十四丁
　付 湊濟寺起立
一 同國小絲市三經寺開基 十七丁
　付 最頂寺改宗 并 法巖寺草創
一 下總國生實大覺寺起立 十九丁
　并 西國遊歷
一 伊勢國山田靈巖寺 并 赤桶心光寺湊野來迎寺創草
一 諸所巡行美作誕生寺參拜 廿三丁
一 伯耆國宍鴨大雲寺 廿五丁

並赤﨑專稱寺起立
一出雲國朶村別願院並松江極樂寺開基 廿六丁
石見國尋記主舊跡築後拜三祖影像 廿七丁
一於博多里見安房守殿對顏 廿八丁
一渡海於船中龍神乞血脉 廿九丁
並嚴嶋明神影向
一華頂山江參籠謁滿譽大僧正 卅一丁
並伊勢國靈巖寺千日供養
一南總佐貫江歸著 卅三丁

並生實潮龍和尚傳法有龍燈瑞
一安房國撿義谷原大勝院並浦田別願院起
立 廿四丁
一上總國金谷本覺寺開基 卅六丁
並千田稱念寺改派
一六十六歲病惱依奇瑞快癒 卅八丁

傳本卷之三

一江戶靈巖寺草創 初丁

一 上人教化興盛

付 向井將監境地寄附

上人高德沼地成平地

一 兩君御目見

一 於西丸兩君法門御聽聞　四丁

一 賜添地及築地形　九丁

付 龍神水神得脱並地形速成

一 本堂諸堂造營企並攝屬十八檀林　十二丁

一 波除觀世音　十四丁

一 名號碑現益　十六丁

一 勢至菩薩尊像　同丁

一 不動尊像緣起　十七丁

一 富岡八幡宮爲鎭守之來緣　二十丁

一 八庵之緣由　廿三丁

一 本堂諸堂落慶並本尊來由　廿四丁

附 塔婆地藏尊

一 祖師頭光播眞像之來由　廿九丁

一 上人所述本性迷悟有無偈　三十丁

一御朱印恩賜　三十三氏

傳本卷之四

一奉台命花項山住職　初氏
一同山入院法規　二氏
並鎮守宮再興
一依本多忠刻朝臣請播磨國姫路下向　四氏
附飾万津知寶寺　並　備前國岡山靈巖寺開基

一江戸英信寺草創　六氏
一於仙洞御所説法　七氏
一奉院宣於院御所法門　十氏
並板倉周防守有信伏
一華項山失火諸堂焼失　並　再建　十二氏
附新鑄洪鐘
一洪鐘無銘　並　鐘樓堂地中感金佛　十六氏
一六返名號之詠歌　十八氏
並鞍馬山參詣

一孤雀馴遊消黑子　廿氏
一伏見殿若宮御得度　廿一氏
一三部妙典鏤梓并選擇頌義等上版　廿二氏
一諸堂造營落慶并本堂軒有傘由來　廿三氏
一壽像安置新大殿并供養法會　廿七氏
一造營落慶御禮東都下向　廿九氏
一奉鈞命於殿中御前法門并殿中免杖　三十氏
附依鈞命歸洛延引
一仍回願力幽靈得脫　卅四氏

一遷化之事實并遺骨成舍利　卅五氏
一嗣法高弟名實　卅七氏

靈巖上人傳記巻之一

靈巖寺首座靈碩集
同後學首座存統校

家系并誕生剃度

上人諱ハ靈巖。字ハ松風。擅蓮社雄譽と號す。駿河國沼津の人なり

古傳大綱記。山田記。南都記等ニハ。沼津といふ。緫系譜。生實記等ニハ。上總國天羽郡佐貫の産といへども。既ニ華頂山ニ住したまふとき板倉

周防守殿へ送られし文に。予稟生駿府。知筆而出家。志学而催意於求法。立出故郷。過箱根関。凌湯湯蒼海。拂七峯雪。越峨々青山。趣東海下州。澄心於龍澤法水。とあれど。沼津を正とすべし。一說に云瀬名の庶流と。即上人の本系を紀せり。是を閲するに。父祖傳襲瞭然たる故に。今彼紀によりて録す

今川家の一族。沼津土佐守氏勝が三男。母は庵原氏乃女なり。

古傳に。今川土佐守とあるは本氏によるなるべし。

或記に云。今川陸奥守貞延が子陸奥守一秀。一秀が子伊賀守氏方。氏方が三男氏勝と云ふ

氏勝。天文廿三年甲寅正月。参河國鴨原城主山岡氏を攻落しとき。父子三人討死せしが。母は越傷に堪ず。胎内の子を出家させまく庵取に乞葷肉を断じて三寳を信じ。念佛怠らざりしが。同年四月八日誕生ありけり。名を友松となづく。竹馬の遊を好まず。葷腥を食せず。常に佛を敬ひ。出家に剃髪しもとをまちけり

古傳に。父出家せしむとあれども後にて母の願
にかなひて初めて定し
永禄七年甲子二月十五日。十一歳の時。同所浄蓮
寺
千部山の開山増誉ハ
山城国の人。弘治元年乙卯。當國府中に二ヶ寺
を創めり。一寺を起立し二尊山善光寺と名付。
後また當寺を開く。天正八年庚辰十二月廿日
に寂
智行徳望衆人の仰ぐところなり。去る永禄四年辛

酉當所に湯をたてゝ當寺を創基せしまゝなり。小
児の母儀増誉へ送りて剃髪をとらしむ。増誉かねて
小児の凡ならざるを見及ばれしかばよろこびて剃髪せし
め。肇叡と名付られ
生實記云。父ハ里見氏母ハ藤氏同所勝隆寺
寺といへし（此時ハいまだ善昌）小入秀嚴和尚に隨ひて。天正二年甲
戌十三歳にて出家。性志後慧。志学の後大巌寺
虎譽上人安誉を師と仰ぐところ日之。○總系譜に今此に依る。
霊巌の嶺ハ。剃度師の字を受しや。知より

天正二年は御年二十一歳なり。愚案ずるに。上人沼津に剃度し。増上寺の仰より。佐貫勝隆寺光誉秀巌の許におもむかれし後。今年初めて大巌寺に入られしを。傳来の謬りにて。年月相違せしなるべし。まづ里見氏といはゞ。後に里見氏の帰依ありしを謬傳せしか。里見家の系譜そのかの房州乱紀などにも。大巌院建立並上人の事ども他国の僧と見へ侍れど。沼津の産なるよし初めて見へし

大巌寺へ初入寺

上人幼稚より。俊邁英達。氣宇曠宏。凡なる人ならず奇童とぞ称しき。三經禮讃等を読誦するに。一をきゝて十をさとる。解了の迅速なる。老成をこえて。ことに世に及びがたかりしとぞ。増誉。五部九帖。二蔵義等の章疏を授らるゝに。やがて檀林に入しめんとて思はれけるに。浄土の知識。諸国に遍歴し列を重ねて。法幢を立。大衆を教化せらるゝの盛なりしが。道誉貞把公。下総に生実に。原式部少輔の檀越として。大巌寺をひらき。一宗の緇素多く輻輳あつまりしを。文殊支利の善財をしく

德雲比丘に道を問せしにおなじまなれば。眼光の徹照し。永禄十一年戊辰。旅亭の月に獨歩し。山川の險をわたり。草鞋の底をはなしく。吉水の正流を汲んと。生実の名あり。道誉公一見の後。其偉才の機をかんじ霊智の生所。我宗の柱礎となるべしとて霊巌と名を改る。安居の法つ。上人室口法別の室口と命ぜられしあり然しに満座の大衆皆驚異せざるはなくのなし。道誉公特に稱美ありく。我山の大衆を輪轂せしむべき納僧なりとやされしとぞ。時のみめしる半におもひけるも。果して後十八年を経て弟三世と仰がれたまへるも。寛に栴檀は二葉より芳しきに同じたぐひなしなや

従テ道誉公ニ相謀ス五重ヲ

天正二年甲戌にして道誉公の座下にありて讀書法門急つるなく。学雪の勤功をかさね。ゝらまうれの道誉公もさぐなきめでいたくしまれける。然るに其頃道誉公微疾ありて自ら往生の期をしりにあるを知りて。上人を召て引明に及す五重相承をさづけしめける。自ら臨命なりければ。宗脉に

傳ふ歴代すとともに相傳せられ 上人ハ年登山より七年ふおよび古徳ニ三年をわたり
浮ミて道誉公傳法ふ人をはしりを悦ばれ娑婆の妄
更を他邦の雲と念を絶浄土の往生を自國の花と
功を積らしらさむ彼土の荘厳をおせらる物成なりと
ぞ。終ふ同年十二月七日西ニ向ひ低頭合掌して至
まし終りなすひしらぞ。人皆大往生の瑞なりと嗟嘆
しあへりとなん

從安誉公傳兩脈並璽書補于大巖寺第三世

開山道誉公の門下数多の中ふ安誉虎角公ハ文筆の

奇才禪教僧修の達徳なりしかども猶よまう世第
二世となり。実ふ聖浄二門を渾然と了し。吉宗
乃重寶を末代ふひろきえく。四義究然の実義を示し。
傍ふ右傳道の為に撰をやき。誹ふ無礙の籍あ
まく論議はつたなふ招きらくれざ。上人會下よ於て
苦修練磨ぞ。其如法なる事ハつも更なりし。天正七年
己卯の冬ぞ宗盛をげしく大雪小止もなく降く朝を
填く人ぞ。角公求法の志乃厚爲を試んと。例のおとく
論傷の大鼓を打せしむに皆大雪ふ僻易しくくや

公頌義部頭應徹と。上人とのミ異名をつけられけり。角公
ら志ふ法を學れと稱美し。此ふ真門の源理を備
へし戒珠をも相承ありけれバなるべし。或ハ無礙よ
契識し云く。靈巖の眼ハ學なりて粗佛祖の幽
趣を通じ實ふ我門乃表傑なり。ふより指南をう
けしもあゝとぞいへり。安徹。靈把。存榮。賢古。春的之超
天朗。宗因。圓及等の衆ふも二字を呈し。座下ふ
學ありし。柳上人二公の下ふ周旋し給ふ事十八年。
經論披閲の外ふハ。十劫正覺の月光を龍澤乃波に

承はすゝめ。稀究練磨の年をわ終ず。極たる乃花
香を大嶽乃此谷よ顯ハしたまひ。又或ハ涌元秘術の心
蓮を五乘弁入乃庭よひらき。攝取遍照の智光を。實
相觀念の窓ふのぞまれしかバ。ミな貴の諸侯。こぞつて
東照神祖も常ふ名を咏せしめ玉ひ。ひたすら浄土つを
神祖世々の御宗門となし。常ふ法門などを聽せしめ玉ふ
されバりきぶにも上人許化ありしとぞ。おなじく名高き四方ふある
かりしそありける
天正十五年丁亥八月四日。角公口中を悩ミまひ四大

日々衰へさせ給ひぬ。傳燈職を上人に譲与し口訣相
承の要旨。璽書印可あらせられける上人謹て傳受
心肝に納めまゐらせぬ。角公嗣法の断絶せざる事を喜び。
頭北面西にして念佛しつゝ入寂ありけり。春秋五十七也

於江城法門席有事辭生實

上人世壽三十四法臘十八年にして。富山の大学の後掛錫あり生実記に三十二歳とされつあやまりなり傳燈の師位に登り給ひしぞ。ひさしく学
徒の法外ひとしく増長せしめ。弘通をもはらとせられ 古傳に。
じく當山に住職せしめ給ひとあまたゞいまだ御入国より四年當時神祖命
などおもんばかる只此妙法を興しけるなりけん 道誉

公の称念ありけるも。縁紀ありしかば心ふかくおはしけるにや。
東照神祖天正十八年庚寅八月御入国の後。殊に當宗に
帰依ましまし法門を崇じ給ひけん。然るに義学の場を拡め金
城に縁山を定め法門を興し。年数經てもしまし。此
年冬。御前法問の要。出能化と浄論に及ぞ
ましき。御前をはゞからず自ら學に西能化とも
争ひを起せしかば。上人は直に東部の方に鎮め
大綱を云。慶長中於増上寺報謝法門席
靈巌隨身所化對国師以法門不當此論牌

前法門狼籍為科。伊豆大島左遷同八癸卯春化導此地文。生實記云一日有啟背幕下高命遷謫房州文 總系譜同之是諸記非今度之事又左遷と記せしも縁傳なり其の頃上人の教導を嫉みて兩度まで讒奏せしと。取あげられし縁は檀林の宗祖となりしを上華頂山住職に任ぜられけるは下の傳のごとし。く縁傳なりければ自ら知るべし

南都靈巖寺開基

上人生實に帰郷のつぐ。直に東海道に錫を飛さるゝのち僧俗ことく道俗の請により。浄宗の秘奥を説給うこと所々に寺院をひらき。又頽廢の梵刹を再興す（或記に。近江國蒲生郡。布施村無量山福壽寺。同國上羽田村。玉屋山圓通寺も。上人の留錫草創の地なりとぞ。）帝都に清する地多しといへども。本山ゝ憚りありとて終り南都に趣かれ。講説修行をまつらるに。當地は法相倶舍の宗盛なりしかば。上人無碍の辯を以て。五位百法の大綱。八識四分の樞鍵を論釋し。因果決擇。切磋琢磨するにいみじくありければ。興福東大の兩刹。西大招提等

並に喜多院清涼坊乃切礒学道をきはめ。志学の砌
佗行までも随吟順聴しける。天正十九年辛卯終に
一宇を建立せられし。是を霊巌寺と名づく。院号を肇
叡と号せられ。尚永世のあふ業を從せられ。永亀山と
名づけ。弟子念参ミ郎をもと弟して庵ゆるし。本住三ケ
年。法門緒秋さんゆるく勤められつゞ。又宗の道
俗。上人乃法宗よ通達し。去法乃源底を極められし。
宏才博解ニ信伏し。入門帰依する者おほかりけれ
山城國宇治称故寺住職並滝眞西光る起立

上人乃道名かくれなかりしかば。去れ山城国久世郡
宇治の里より請じて云るそ。一行山称故寺を號專修院
去る永禄十二年己巳。向誉称故和尚開基せられて
かど。本堂造営を後代へ譲り。自らハ只枇杷の庵
かまへ。住地ニ光明院を草創ありしより。既にこ
世まで及ぶといへども。いまだ本堂造営乃功を終らず。
上人来住あつて化しられ。村民老若甘露乃法味にあ
き。寺上菩提の資糧を増長せん。願くハ本堂ご建
を推めんとて。偈をうつし給へん事をと。いと称ありけるに

請ぜしかば。上人彼所に往詣し。辺境の済度をなさんと縁によるべからずと。文禄元年壬辰の二月十一日。弟子あまた召つれて彼地にて別時念佛を興行ありければ。道俗のたぐひ群をなして。自然に皈信あつまる。同年九月十八日まで。毎日説法しけり。上人いたく専念の秘術を示し。凡夫出離の要行をすゝめ給ひければ。帰依ます〳〵多かりき。然るに同国松浦郡御厨村の老翁。遂に法名を仰ぎ。村に一宇を創造し。上人を請し開祖と致しければ。上人其寺を遍

霊巖上人傳記一

照寺と名付給ひ。念佛の勤行を勤めさせ給ひぬ。かゝるに今も彼寺の末村遂に其化縁に染ことなれば少くもおこたらず。さればとうしろひまらん辻堂の如く来りなどせしに。草創開祖の名までも縁もつまびらかならずと。本寺へ達せるも多し。惜むべし。上人の草創五畿内に十九ヶ寺と申伝ふる。大和山辺の内ふ。上人の事跡多かりしかど。年月を経

於伏見城奉命生實再住

附 春日神前佛舍利感得

文禄元年壬辰二月廿九日

東照神君肥前國名古屋へ趣かせ給ひしかば。御上洛

乃とき。伏見御滞留乃中。山城国八幡正法寺住持。
大超和尚。御機嫌伺ひに出られしかば。正法寺ハ相応院殿おかめの方。御菩提所
とて親しく召されけり。大超和尚ハ御目見えやうやう上て。又知らせ給ひしかば。ある日御着陣を設し。御挨拶せられけり。そもそも
佛法御清談乃うち。霊巌上人近年上方に居住乃
よし聞しめし。いづくに住居せるやと尋させ給ひければ。唯
今東都に寺宇開基。道俗結縁乃折から。志学乃
徒。彼講法門を設けより。修地に法門を扱ひ。経論
講釈絶るなく候也。東都浄宗繁昌乃地となりし
ぞ承るとやかて仰けるなるぞ

神祖御機嫌よろしくて。霊巌ハ法によって也。大
衆を領ずべき器量あり。さらに冥業して当宗乃
棟梁となりなん。かねてより急ぎ関東へ呼べし。大
巌たりて再び法幢を建つべきよしなかれ仰出されけるぞ。
大超御懇の言葉を感載し。即時東都に赴き件
のよし申上げしかば。上人大きに歓び伏し。即時に大超和
尚と倶に伏見に参上し。御目見え奉りけるぞ。于時も御
懇志ありし茶風呂。時服。白銀を給りぬ。上人御
懇情の忝なさ東都にまかり。御悲願あれば。猶遍に感佩住

表せらんや。さあまちてやゝく旅装ひをせられけり
古傳。並に東都記にも。然らんまく御目らん。大都も
然らん併せて考へ行り。案ずるに将軍家譜。豊公記。
大業廣記。武徳大成。武徳編年集成。列祖成
績。奠陰逸史。藩翰譜等。文禄元年壬辰二月
二日。江戸御進発。十六日京都着御。是為援豊
大閤朝鮮征伐也三月十七日。京都御発駕。
悲此時乎。南都記に文禄二年癸巳十二月十五
日。生實へ再住とかきてたび。旅装及御行化の事に

年を越とえしくり。称故寺の記に。文禄元年壬辰
九月十八日。本堂建立とあり。さらんは旅装半
ながらの建立なるらん
上人門弟子に告て曰く。春日神領乃地に住し。和
光乃結縁を蒙り。濟度利生の恩にもあまれり。此勝
地を去て他に移すべしとて。數寄をぞ建られし。神前に
めづきるゝ本地垂跡の因縁を仰ぎ。法楽被利に
乃づかまきこ黒蛇にて布を縫ひ。折て紙を望へ。
神殿より出。鮮年の人をえ由し。上人の袖せらる

扇の上にのせたる紙をさし出して。宝殿の内へ入し
に。当山の社人とおぼしくて。社檀の上より持出たるを
見れば。是は今大明神より御福を進ぜらるゝとて渡されし
ば。上人頭にいたゞけ紙をひらかれしに。金色の仏舎利数粒
恭敬しく思はれけるが。随喜の涙を流して。懐中ありけれ。
其時参詣の人々。上人の法徳神明の冥助
を…内證如実に冥加なりけるを知りて。遠近
の持別をかふむり日本国中結縁せざるは。舎利へ天下
に縁の上也。神変の上に。代々に移らんより。積高の

什宝とせんがため。入庫什器の一と定めらる

生實へ帰山す　供幢感得

文禄二年癸巳二月。東都のさわりなきを立られし伏
見に到ても。御暇も賜はりてぞ。再び檀林の職位を
残ふ。法幢を執すべしと。伝馬を賜はりて東営の
明月を旅亭に詠める夕まで。雲水の観んを
まされ。西山の斜陽を馬上に眺めし時。五条斉
大の妙縁を偲ばれ。浅口の船を待ちて。衆生一字を
愛にてを渡さん事を願ひ。山陰に寄をなさひてある。自

佗ともに煩悩妄想を離れんとて門下にこぞりし百數
名の學徒。下總國生實の大巖寺にて衆徒をあつめ道場
に出進ひ。極信門にあまねく遠くよりあつまる二三年の
新到のともがら忘れ毎びに宗乗の論ひを述べ法味を
受んことをねがひて。立ことよりも年を参せしかば。澤はく
弘通ますます盛んなりき。此時所化の寮へ来り随喜し
仰せしかば衆皆四方山の雑話しけるに。上人のたまはく
く。今描く法道のことを示せり各守しやと行しけれ。
はく等ぼとて。上人おなく思惟しのたまひて此もささらく

まふ時の億き緒をなるぞよ今の緒なき故にしらしん往年
千葉寺に法幢をたてしかど我々の義よ聞る者あれざるよ
されば弘化の埋もれんと思ん由しく即ち千
葉寺へ（千葉山の三縁山寺山一両長て上人剃度の寺也）佛像をつくりて緒を記くして
るふか乃分の名さを新世の時敵の陣衆によ奪はん
事を恐れて。密なる埋めき置ひ給ひれこちら年月は
過ぎの去られ。知る人も皆失亡せしなり今彼所詳なら
ざりしかども上人がなく我存するなりけり
出しにと此寺より此とがめにさましきかやと尋ねられ

なりし。住寺を返(へんじ)して。此事を越後(ゑちご)にも付わたし上人の感得(かんとく)を以て[illegible]しけるに。なぞらへ然るにゆかへ屋きるりぬんやとなりて上人をいつとて。[illegible]人を請(ゆうん)し手毎(てごと)に共(ぐ)を杖(つえ)をおもせ律(おと)を青せし方より引起り。東所(ありどころ)へつくなし人を詠(ながめ)けるに忽(こつ)然とふろふ鉢(かん)を耳(みみ)に響(ひびき)なれどさして多(をつ)くて荊棘(けいきょく)の中を穿(つつ)せさせかり僅(わづか)四五寸ばかり下に空(つきあて)しける。此人たずみたれ碩躍(やく)しく掘出(ほりいだ)しけるに瑕(きず)もなき宝(ほう)の霊(もく)の法像(おわがた)なりけり。則大厳寺に引取(ひきとう)て安置せし。此法像付[illegible]

乃為(ため)なく。法のかりを頌に云。本源洪鐘響(二)萬徳(一)。今來不絶千僧聴と云く。（書面その辞句は上人製述六巻の精義集に出る。）この時千栗(ちと)生寛(あいこ)凡(およそ)四五里を経の人(かど)群集(ぐんじゅ)し。数百年埋(うづも)れし法律(ね)の再(ふたた)び世(よ)に出しる事こそ不思議(ふしぎ)なれとて。感嘆(えんえん)せざるはなかりけり。慶長中に禁寺する事あり術(あそそ)しけるに。先年上人の威力(ゐりき)によて。経(よく)久しく埋(うづも)れし法律を掘出させ給ふるに此代まで旁(しう)。後之所(りと)にして此寺の什宝(そうじ)にくりて。梵鐘(こひびがり)は城中(きしん)に寄進し給ふて。空(くうおん)なり。法然(あの)の作(あみだ)の聖(あのどころ)たるをとろしく。上人は然も宝園(ぐわんらん)の塔(らう)を守(せ)ま

くもちを梅も出しつまりていかなる縁にや直に千栗
寺に至の進せしかりし今彼寺に於てかりけり待だなりとて。
株るに神の梅出たるも此寺より以発あらましと深く
なげうち後ほまさかりしかば我を申せまるされし。彼我の
念一道見もなきことにてこそふべし

龍澤山堂宇再建

当山は始め龍澤禅尼 原式部少輔平胤栄室 の起立にて道誉公三縁
山を辞して隠栖創造ありしが。後亡つひに住持なく
かりし堂舎頽破して沢にてくづれしぞ。造化おふらくば

程なく安誉宗小織を携へられ。角宗の道場にして一時ばかり
あやぎいはらく乱後信者あまりして。角宗講堂の道場を
。悲く修造を加へまくぶられ。巨材を聚め書縁を立らる
まうけ数年の新らたを営りし。いまだ造営はいまだ
。まふく御と勝まひかすらまふ逝ずしく示寂あり上人
角宗の遺志を継ぎ修営の志を起されし。機縁を募りて
助をもまりれられ。其の道より帰依の輩ござふ財貨を寄附
しられ文禄三年甲午秋八月上旬をまち稀き。斧斤を
全く此山に上総国五井乃領主。松平紀伊守家信 法名常立

院上誉大信露雪大居士寛永十五年戊寅正月十四日卒去 上人に帰宗あつく。道盟浅からず。故に
五井の濱辺にて。住古菖草の佳産なれば。葭三千駄。并に
黄金若干を進送し。力を戮せられ。慶長四年己亥 生實記六年と有り
修落成ありしかば。再び甘露の浄門をひらき。弘通
大に道を起し給へり。爰に同年八月十五夜。月を澄して吟
学の窓に有親しく入り。松風声をきゝて。有月清浄観
心の勝縁となりて。幽理の悟證ありけるとぞ。即時
に筆を染て字を松の枝にきざみけるとぞ

龍澤山畧縁起並衆人輻輳

柳当山の生實城主。原式部少輔起立
千葉介貞胤乃子。陸奥守満胤乃孫。原式部大輔
胤高。それより当所に城を築しより五代式部大
輔胤清。其子胤栄が代に至り。天正の始思ふところありて
は臼井城に移る

生實御所足利頼純朝臣帰敬の寓縁也
下馬禁札制條等を此縁中より。数通当山へ寄
附せらる

弘道参考 本朝浄土高僧傳。浄土列祖傳。新撰往生傳等に本傳あまたまちまちに略す 成田山呑鈫の

現益を蒙り患解日々に發し道誉四遠に集くのみ。
地主織業乃夫人親しく法要をきかんことを願望し
よ。織業許従につらく侍せしめけるぞ。化他の勝益を
よろこび。地中に於て為道のため夫人所種の約を
結ぶ。地は乾隅の一園にて。新林の寮地なりければとて
寄附せしは梵刹と覚えて叢林となる。永禄十年
丁卯九月七日掩粮あり。法名盈誉龍澤利貞禅尼
と號す。故に世の人よく龍沢道場とよぶ。天正二年甲戌
十二月七日。道誉公鴨林の後安誉公のつぎ上人とここに安

道徳の柄任他に超しける。法は海内にあふがしむとぞ。蓋
当山の地理をみるに。三面は松山。前は田園あり。山高
からずしてしかも喬松百尺。霊鳥翱翔すべし。壑深から
ずして而も脩竹千年。神龍亦蟄居すべし。まことに望むべき
富峯おこる。尊総海眼を洗ふ。況や當波気を発し
漁翁名を佇る。実に絶勝の土地なり。上人再住の
後は。ますます栄えん。當流常に福輳す

文禄三年甲午五月の大衆傳に不歴。巌立。巌
宿。團霊。窮道。玄龍。守政。鑑徹。崙瑜。覚随。文学

永波。年碧。玄頤。一道。圓牛。満玄。巖立。霊頂。荷山
順學。曇及。南随。祖覚等ハ山下の寮にあり。方丈にハ
玄愚。九眼。賀屋。利角。守珍。朗月。深廣。龍
造。麿笈等常に法問をなしけり
教上並下の利安居法則の規。他山を上人定て
準縄とせしなり。文禄四年乙未四十二歳の時
霊夢によりて一幅の肖像を画工に絵がゝせ。秋尾條の
法系を称せしに。後継を乞しかバ中に臨終の法語を
書て與よ。況我信の軽毛。敢知旨趣。御惟釈迦此

方無遺弥陀即彼国来迎。彼喚此遣豈容不去也と
祖訓に載られし御信の宗をおもふに見を入るゝま
ゝに。本意ならぬ事いふべからず。然るに頃者空師を
乃さんく我ちに烏帽子もきざる卑なりし十悪の
法然房愚痴の法然房が念仏して往生せんとおも
ふがゆへにまさに聖道門のあらそひに勤めく
生死をはなる。浄土門乃ものは愚痴に帰して往生を
遂るなりやあらむ。然我門のものは極楽の
慢邪乃ものにぞありがたき示なり

安房國に宗門弘通里見家帰依

慶長八年癸卯。故ありて安房国に隠れて草菴をむすび。諸宗乃志学に対し。経論を講ぜしかば。國主里見安房守義康朝臣。上人を尊崇の学道にて帰げとぞ。その本邦を信ずらく。老少帰依を信ずべしと解して。金臺寺を旅館と定める。住持四世豪誉九把を。前乃城主義康の伯父又上人の舊友なりしかば。倶に随從称讃ありしかぞ。道俗なべての郷ませずといふべき

金臺寺記云。文禄中。寺領六十石。佛餉五十俵寄附。開基ハ昌誉順道。文明八年丙申起立ありしと。九把を中興と称す。住する事二十四年なり。初鎌倉光明寺に修学。元和九年癸亥四月九日七十二歳にて寂す。又来当寺ハ日蓮誕生の地にして。國中多くハ彼流なり。浄家の寺院漸く二三ヶ寺のみなりしかば。此度上人の化導によりて彼佛門に入るの輩少なからず。上人宏才博覧をもって。聖道浄土乃二門をさとし。當世末代の儀

乃要路。偏に念佛をあつめ。名理文繡を盡し。六八本願因位果成の細釈萬行の稱名の優劣自力他力の差別をとき。易行難行の趣を述たまひしが。始の程こそ不信の徒ありて。對論せまく思へるともがらありしかど。聖教の道理に屈伏せしかば上人乃才智ひろく。不審の義あるも來由をのべしと縁をなしければ。却て門下に属し。捨邪帰浄せりとなん。

古傳に。東都三縁山にて御法事ありしとき。諷経卯の上刻に参堂なるべきを。上人前夜微疾ありて。出勤遅参に及びけるなり。法事奉行へ。故を述られければ。午の刻に出られけるに。禅家臼井何源寺と同時なりし。彼寺の隠居は上人の所化衆諍論騒動せしかど。奉行の衆のとりもちにて。両寺ともに納経はさしをかれず。さすがに御遠慮の足らざりけるや。上人を其座より拂ひかけり移られしなり。案ずるに此とき近き路まで上人の御教化に帰せしかり。伊豆の大嶋に松風山

潮音寺あり。上人の弟子念蓮社専誉を開山とす（後大和の移り浄真寺に住す。又後宿院を建立す。安永五年庚子に寂す）。又三宅島に高根山海岸院大林寺。神津島に冨巌山濤響寺なり。上人の名をば続へて寺号となせり。

大網村大巌院草創

関主安房守よし人の教化の盛なるを感じ。諸家中々渡されけるも。上人に帰依し奉りしより。諸人を善事に導きしは乃ち我法の幸なり。永く当国に止まりて教化せらるべきよう懇望ありて

有けり。家老中を始め。諸士各信敬招待し。戦死の追福。先祖の回向を乞ひける中にも。東條民部左衛門。近藤九郎右衛門は家中の上席。里見の一族として威を士に奮ひ。権一党にならぶ。宗契は殊更上人に帰依せる事他に異なり。或日法話を請ひし跡にて。上人にかたく此頃安房守殿しかも辺境の民。道の事往来も悟らざりき。然れば当国を得て人民を教化せらるべし。休息の座補をも構ふべきよし願ひ奉る。上人

乃種なく。大飛止揚のところ。一寺をひらき祖師を勧進
せんとぞ。因縁ありけるにや。強くゆかしく法体にて
ちるべしとありしぞ。遠藤氏此よしを聞きて
やがてわれに其地を望みけり。さらに其まゝせんべき
よしなければ。其さうの勝地を尋ねけるに。山下郡大網
村に勝境あり東に山を抱へ。西に十余町ばかり
直に滄海にむかひ。正面に富峯雲中に表出し
駿相豆の群山を波涛にながめて。霊地なりけれ
國に新建して寺の附の法然をそ世にいはるゝ。

將國にをさめらるゝ。大網一村一圓に東の山を添え。
永世寺境に進ぜらる。近世里見家を檀越とし
帰依ありしとぞ。上人の知恩拝辭して寺院
乃功を與せられけり。里見戦記 里見家譜 総房軍記に 城の丑寅乃方に大網寺を建立ありと
なり是。上人寺地寄附の禮謝として參謁せられしに。
義康朝臣 先主義康當主義隆なり 對顔のうへ。此度の止揚所にては
不自由なるべし。何事にても用辨の儀は。年寄
まで仰らるべしと。懇に答へせられければ。上人寄附し
て國守の懇情をよろこび。浄土弘通の其法幸を

ことごとく人みなむかひけり。時に藩士ら座してかぢふかく送
使あり。上人修寺にいたりて後来とどまる。佛法山
大網寺大巌院と名付る。七日七夜利時供養を
執行し昼夜二座説法せられけるに。聴聞の諸人は
あまりの佛法を感悟し帰依をなしけり。所化寮
をも山の中に作りて有縁の所化を止湯せしめけるに。
程なく二百員に及びける。毎日論議練構ありて高
きず。在家にいたるも精義集は半ばに此時の
集の中なり

大巌院本堂建営并天津山より材木を出す

上人時の人々にかかるをば修せられしに。或人亡親のためにとて
二ひらをあつらへにけり。餘の費用をかくて丈をもとして
諸堂造営を企てさせ。番匠を招き十五間と十
二間の殿の図をうつしめまて
東ねし上人二両の施金を根址として。大殿の建
立をはじめける。江戸霊巌寺造営。華須山の
再建なりし洪憧を待ちまいらずして其余
の堂字ども立てて新めでし

時に行ふ人の多かりけれど。上人説法の席につらなりて。
我此度一閣造立の功をもて人々に資財なき
を嘆てける。此頃夢想のうちにあらたに目のあたり未来の
示現をかうむり處すべからざると留まりて上人の道
徳さんほめもよしめて信受しけり。上人年来坐へ両
國のうちにきく。伐木を求め乃たちかへり歸りぬ。蒿老
のうちに上人の法成を伏せめるやまかむ天津山にて
行径も伐出しかてもかりぞけれど。人皆よろこびあへりと。
上人猶よろこびて。抑天津山といふは南北西の

に方高山聳へて峯一行乃白雲常に山乃腰をめぐる。
人跡遠くして鳥獣のみ氣を負へず。東南は滄海
渺々として南岸千仭船をもすぐる便りなし。
上人攀ぢて至り居住の山乃径路を求めまししに。
往古より魔所として若山に入木を伐る時は山神
ふかく祟りをなす。故に巨枝満ちて此皆天狗の棲
處なれば。杣人いまだ分入りてさへ入ることなく却て
此造営の妨ならんと述ければ。上人いふにもせで其
夜は止宿せられ。終夜勤行ありせられ如来の擁護を

仰がれけるに。不思議なるかな。弥陀の手より金色の光明
を現じ。山林を照したまへば。山神帰化の礼をなす。
然して後。よくよく朽たる堂を修て。庵室に居給ひて。
夫正法興隆ある所は必佛神擁護あり。あやしむべからずとて日ん
ぢて。舘山より召連られし仙人をまねき。山よりつく日ん
給ふに山岳突兀として重峯峙く老檜直に杉村を交へ。
白昼も黒き幽径を四方に覆ひ。時に風妖気をさまり
守りに穢魔の所なりしぞ。更に峯頭にむかひ
山神鬼魅等を勧請し祈念読誦し米南へて

しかうして後木を伐らしめ給ふに。何も障碍なかり
けり。往昔此山に入人まれなれば。俄に山谷震動
ありしも大木倒れ大石を転げ出す。砕裂せし方
もありしに。上人の造給ひ。山路にて行乃碍りと
なりたれば。神并より伐し倒るべき大木を思ひのまゝに
伐倒しけり。然てあれど。かゝる巨材を里に出すべき道
なかりしに。上人に教けるは。かゝる谷に落し置べし。我
に別るかくひきゐてのちにひく。舘山に傳へ給へ。
用木既に伐終りぬ。上人弥勤に祈誓ありしに。弘法

擁護の善神王。頻りに彼桟木を。除かんと
滄海に流し出し給ふと。雨乞の法を修せらるゝに。
その夜俄に黒雲峯頭に覆ひ。雷電霹靂し。
大雨車軸を流し。洪水漲り出て流れ行けるに。桟木自ら
流れ行きて滄海に押出しけり。元より此浦は荒海にて
しばし波高ければ。桟木沖へ流れ行かず。疾く天津の
浦に打上りけるぞ。上人大に悦び給ひ。頻りに我偏
に諸神の擁護なりけりとて。法楽を捧げらる程なく
天気も快晴し風静まりしかば。鉄山より大船数

艘をやとひ彼桟木を。積入れ風に帆
をあげ舘山の浦より漕出させける。上人の乗り給ふ
佛神の擁護すまんことを祈り。信伏せずといふ事なかり
けり此時上人が乗り給ふ船を先とし行く船に至て
外浪荒き折から海中へ沈没せしめけるに。
海上も穏かなりしかば。船頭驚き海神を怖く我船を後
念し給へと。御名号を海中へ流し給ひける大なる
鯨来り名号を喉へ沈むと見えしが。数千萬の鯨群り
来り彼船を押し。鉄山のこなたへ程なく着きせられ

へ。船子ども是をながめて不思議の事かなと思ひあへり。
此事其の僧に問ひしに。古傳に載する所にて人皆傳へ
しり。誰々語り傳ふる事なれど。今も見てる事なり。大度莊飾の
梵刹不日に成就せり
古傳に出現念佛道場建立をよろこび本引せし
事を載たりといへども人の信じがたき事なれば是を省く

大巖院堂供養法門 附 別時開闢

翌く伽藍成就しければ。供養の儀式をおこなはる。終
りて一則の法門を示す。其の算題は四義究竟やと唱へて曰

本来ノ覚路絶ス透-得實躰ヲ透-得ノ覚道有ニ酬-報化用
經ニ施メ城園ニ容ル四輩ヲ門教ヲ單信直ニ通メ無ニ一堡モ實義
問答數刻に及び。迭に玉をとりて法戦盛なりし。見
聞の道俗も耳聴を驚かし。結縁の者おほかりし。
念佛を信じける上人更に昼八夜の別時念佛を
修行し給ふ。其の男女の参詣しける。超世本願の有實末
世衆生の妙行を信に述べ。後の衆生をも勧進しけるひ
より別時も修行して自ら大巖院の二字を横額に調へ。
本堂の正面に懸させらる。今年までは既にめぐる事寛

永十三年丙子。朝鮮人来朝し日光山参詣の序。
僧房の舊跡縁起の御上官。上官の筆まゞ。
當院の文額筆を揮艶美し上人の功徳を讃て
影像を拝せりとなり

大巌院に壽像安置有端

慶長八年癸卯。上人御年五十歳の時。思ふやうへの
かゝる末代永く結縁のためとて。鎌倉より佛工をまねき。
自身の壽像を作らせしに。彫工能く生身に似せれば。
則開眼供養ありて。済度を述し給へり

三科七大如来藏　五眼具足満ツ二識身
本形影像同一體　生前没後無窮化
此文の述意は像を見ることなかれ。上の勢至縁起をみよ
昔に上人を模写して長じ給ふ。時に上人寿像に
向ふ。雲居殿にて上人の御手づから永く当寺に住持し。
伽藍を守護し給へとて。木沓と拍木を座右に置り
忘れ給はず。今寺宝とし是を貴ぶなし

中尊佛於南都造営並神明影向

近寺より御長二尺余の阿弥陀佛の尊像を寄附し

身を佛に安置しく供養をとけられき。更に御長五尺三寸の三尊像を南都にて彫刻させらるべきとく三尊月霊巌を崇らされ大佛師に命せられけり。仏師しかこなしゐけるに思ひ丹精を抽むでけれど。お好命満の像九重座般後光の荘厳迄妙を尽しさらつけ上人迎ふ御迎としく。同年九月南都に出發ありて。先年御本尊ありかは霊巌寺まく新造の三尊像を。宝眼供養七日七夜の別時念仏を修せらし。昼夜二つ夜の往法は結ぶ願しかど

先年法縁の深く群参しけるに。六日の夜の両停只今のことに法の懐ふなかみ庭に満ちしかば。上人僧徒ともに夫念佛を一切衆生往生極楽の正因六方恒沙諸佛證誠の証なり。此教をひとへに行ずる時こそ。諸天善神も守護影向し給ふとのことかけしに。雲中に異しく春日大明神の御影をのふうつせらせたまふを拝しけり。社人まつりし時辰酉の刻より戌の刻の頃まで大明神白雲に乗じ給ひ。当寺に影向ましまし御新を

しかる程ゆへ今年十月十五日なり。上人別時もおこたらく
本尊を供奉し。安房国大綱へ御帰山ありて。
おゝるを壇上にて安置し。御仏供をそなへて四十八夜
の別時念仏を始められ。最後二夜の説法せられけり

盗賊源兵衛発心自殺

別時中弥陀超世本願の深義を演説し給ひしに。
投化の者少なからず。就中源兵衛といふ強盗ありけるが
此大綱に人の群集すると聞てまぎれ来り打入
人の衆中なりけるが。思ひかけずも聴聞せしに
仮令十悪の者なりとも一念十念の称名の功徳によりて。
浄土に往生すと演説し給ふを聞き。我が身の罪を
しりや忽ち感涙を流し懐より刃を取出し七日が間に結
縁しまつり。仏人をよび出して。けふは我が悪心の事をかたり
なんぢらの所のさしゆるしてくれたまへと思ひしに。七日立て日上人に
文偈をぞ頼みける。いかなる難避をや申来ぬ。心根の
程いつかはやすからんと今まではまぬかれ思ひ煩ひ
居れど。終に終はなく上人にも念仏せさせ
けるぞ。源兵衛しやうすまりけるへ。我は年来より道

のミ業をなし。往生の人のおちこむを嫌ふ。人の
あるひハ返せる物を盗ミとり。あまつさへ佛法をや
ぶるを少しも恐ざりき。善根とてなせし事なし。悪
逆をのミかさねし人ハ時ならぬなり。かゝれどもそも今
佛にまかせ極楽に生るべきや。此あつまりなどの人々う
とも念仏すれバ往生す。佛の誓ひなりと御いへん。
住たる処そや。又悪業を造り来りしこの身なるを上人
ゆへ汝の舌我汝のこゝろ。又我深信して十悪五逆
の罪人なりとも助けらるゝ。五劫も思惟し十劫

ゆゑに正覚を取りたまへり。六方の諸佛ハ御舌をのべて
證誠したまへり。汝一生の悪業ありとも。改悔の心を
起し。一心に念仏せば。疑ひなく臨終の佛の来
迎し給ひて。浄土へ導き給ふべし。さてそも
汝が此年の秋より大病となげく泣る事。身の毛卓
堅して聞ける上人。すでに明日病後のうち。病を
うつし切衰し。やがて極楽へ往生とげけるを聞て。其人
死して異せざるなりけり。上人御して遊の奇瑞の心
状様なれども。亡き人をとむらふべきを志て命なりとする会

術の功をつゝ。往生をとげてふ志らずとかきけれど。
定終く来唯今明日往生せんといひ定めくいの。なお
命なぐしへば。再び悪心起て罪造らんもはかりがたし。
行時と定て此身を捨。極楽に生まれまほしと願ひさ
だまりし日の来るを待るぞと。いひ切らる風情にて
見えければ。上人莞爾としてうなづき。称名せし
む。天竺唐土にも其例すくなからず。此の往生を常の
ものに得がたしとて。隨喜しあへる。大に悦び其日人
我家に帰りぬ。此の事を聞て伝へ。大悪無道の

源兵衛尉なりし。明日大綱を切役するなんかの
世者なりけるぞ。定めて尋常にあるべからずとて。我もくと
群集せり。明ればさ源兵衛尉来りて。[illegible]一日
中の往生をなす。徳聞し待りて上人の教に来り今日
極楽へまゐらんとするの時しき。疑ひ給まじ。御十念
をさづけ給へと平伏しければ。上人十念を授けられ
まして。広き庭にてうかかせければ。源兵衛其の上にて
西に向ひ手を合せ。諸人に向ひ只今極楽へまゐりぬ。
何れも極楽にまゐり[illegible]。[illegible]すゝめを称て

毫。独り念仏数百遍を唱へ終りて。香をたく法
机の前に。刀取りて自ら股に血をいだしぬ。刀
を抛ちて頭首を垂れ。吾今如来世尊の赫奕として来迎まし
ますを。おもひしのびて其へいひしもとして捨たる力をとりて。
いまだ手に弓手の指へ突立て。自ら仏の尊像を拍子とし。
馬手の指へ引通し。刀を閉て合掌し。終に念仏
申して頭をそり乃至をさへしめ。野に来て道をいへ。
一同に伴ひ。実にお代の中のうちにや。是を備へ
上人の内室をつきたいて千手ありと人の慈悲ふかき仏せり

石田三成亡魂得脱

館山の新宅。禅宗四郎と云ふ上人に帰依し給ひ
常に毎日に参詣せしが。其故所化寮より。御住の侍
俗として夜中に。帰宅せんとて里をば。御中十
町ばかりの途中に金堀といふ所を通りける時。俄かに
くらくなり。風はげしく寒気さへ漸く。帰宅はせし
かども。其後を亡じて大熱悩しけるが。三日を過ぐる
そのうちにはさまざまの苦しみの流しとのたまふ
う。大網上人の弟子郎ゝ黄泉の苦を免れさせやと

なりし。此度ふかく御ぢひにて此由大網上人にまうしあぐべし
とゝてかへりぬ。人ゝおどろき周章して上人に告しらせば。
上人きゝ給ひ轉物といふて我存生のうちに
苦をうけて後の極楽をねがふ事あり。轉利病
人の苦をかはりてうけ給ふ。我所縁の姓名三身後のかはりにせんとも
とあらはしかへりて候ひぬとかや。其子孫
みづからかはりに病人の姓名をしるして。附不
かの轉物をつかはして縁にかはりて苦をうけ給ひ
かの雛形を書かへして其苦悩を救んとゆるされし

ける病人小ぶかとなり。某に寿命長五年空しく
なりにき。石田治部少輔三成なり。朋友の企にて
黄泉の苦悩にくるしみ上人のもとへ宿念を作りて
知らせつ。休息の時をもとめて大悲の冥
助を願ひけるにや。轉物の作善しけるに併のおもむき
上人に告しめけるに上人さまをあはれみ。此企を
人々に慰め上生の念仏を修せしむ人あり 石田氏は日蓮宗也
其苦悩をのがれて道場に入宗旨をあらため。
終夜同向ありしとかや。霊巌寺宗四郎が從類にあり

。てら婦人歓喜す。上人の廻向を得て得脱なりぬと。眼をしばたゝきぬ。亡霊もきえてうせぬ。只今ハ婦人ハ鼾かく寝入ける者來まりて。雲目に宗四郎いぶかりつゝ稀有のおもひをなしぬ。上人の高徳冥感肝に銘じつゝ帰依信敬し奉る

靈巖上人傳記巻之一 終

国立公文書館
National Archives of Japan